郷土室だより

第 13 号

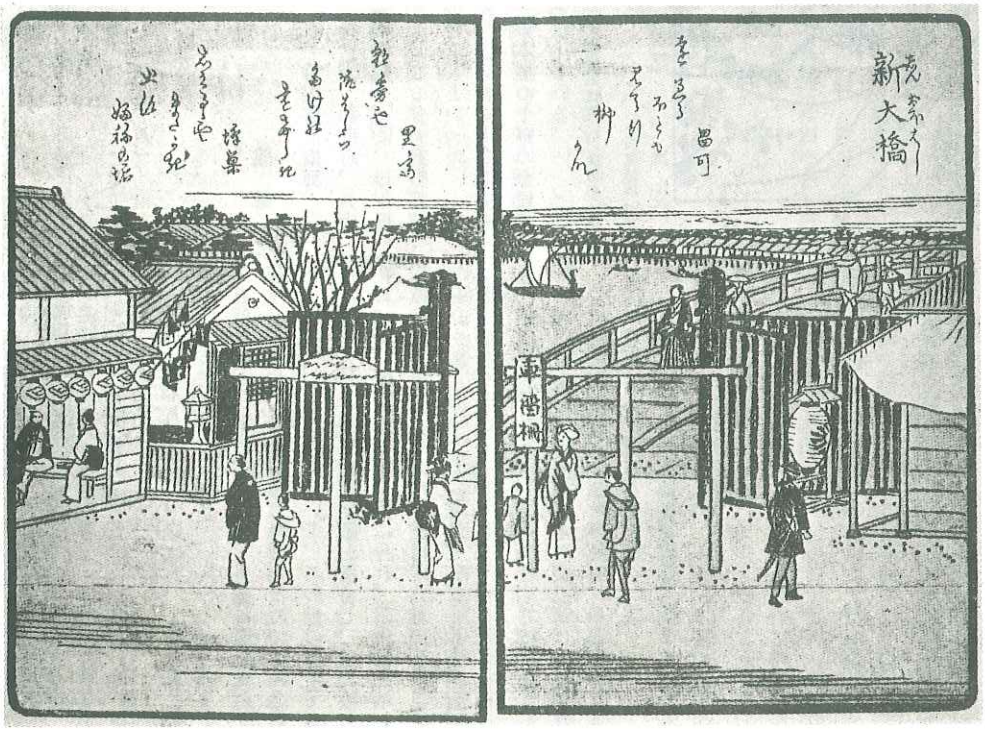
昭和51年6月15日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電 話 543－9025



新大橋

（東京繁華一覧）

中央区名所名物句集 五了

安藤菊二輯

（呉服町）

「乙女の姿白繻子の帯　杉風

呉服物後藤源氏の物思ひ　桃青

石山寺に残る打敷　杉風」

（『薄紅葉百韻』延宝五）

夜や寒し寝心とはむ呉服町　蕪村

（『四季文薄』安永五）

呉服町は、昔時幕府の呉服所、後藤縫殿助の拝領屋敷があったので、この名がある。

震災後、昭和三年に、呉服町一・二丁目、通町一・二丁目に分割され、現在は八重洲二丁目内となった。

「呉服所」は、江戸城大奥で必要とする呉服物＝「御台所・姫君・御部屋様方の御召呉服」を調進するのを業としていたから、後藤家と大奥とは、ずいぶん深いかかわりあいがあったらしい。しかし、残念なことに、資料は散逸したかして、営業の実態はこれを明らかにすることができない。

白木屋

春なれやよりどり櫛の幾手数　東舎（鹿の子）

通り町

「実(げに)や月間口(まぐち)千金の通り町　桃青

爰に数らぬ看板の露　二葉子」

はいしや御入ば師小野玄入

白はぎのこぼれかかるやみがき砂　蓮菊

「『江戸総鹿子名所大全』に、竹川町入歯師、安藤安志、日本橋南三丁目、小野玄入、源助町、兼康祐玄の名あり。『江戸総鹿子新増大全』に、日本橋南一丁目小野玄入とある。また、この分家麹町五丁目にもあり、本家と同じく小野玄入といった。『富貴地座位』に、上上、小野玄入、日本橋はぐすりいたって乳香散とある。なお、日本橋の小野の金看板は、大高源吾の書せしものと伝えている。」

（木村氏『註解江戸鹿の子』）

（五郎兵衛町）

「御息所(みやすどころ)の店替へなりけり

ながむれば松浦と申五郎兵衛町　晩荻

早舟に乗りのぼる京橋　桃青」

（『江戸通り町』）

五郎兵衛町は鍛冶橋御門外、外濠に面した町で、昔、中野五郎兵衛の創開した街地なのでこの名があり、子孫代々その名を継いで、この地の名主であった。明治五年に隣地狩野屋敷を併合し、震災後の区画整理で、槇町二・三丁目に分れ、昭和二九年七月八重洲五丁目内となり、現在は、八重洲五丁目と六丁目に分割吸収された。文政七年、中川芳山堂版の『買物獨案内』に、

○鍛冶橋五郎兵衛町、「のぼせ引さげによし」「首より上の薬」（順通散）売弘所、和泉屋善八

○五郎兵衛町、（十組）紙問屋、伊勢屋作兵衛

の店が見え、『狂歌江都名所図会』に

京橋の袂に露の五郎兵衛町落し咄の席もあり

けり　雪柳園清住

という狂歌も見える。

味噌や元結

ほろみそのはら〳〵まきやぬかご蔓

素朴　（『江戸鹿の子』）

「味噌屋元結は、中橋みそや太郎兵衛（また太兵衛）製する所。この店南伝馬町一丁目西横町にあり小間物を兼業としていた。店前の看板に「元結みそ屋」と記してゐた。また、横町の入口に、磯屋といふ煙草屋あり。一は味噌屋新道といひ、一はいそ屋新道なりと争ひ居たりしといふ。狂句に、味噌屋新道田楽の附地口とあるは此処を指したのである。」

（木村氏『江戸鹿の子註解』）

（坂本氏の美艶香）

美艶仙女香といふ坂本氏のせいする

白粉のしたかきに、美人をよせて

はつ雪や美人のはぎの又白し　南北

（英泉画、錦絵の賛）

「仙女香」は南伝馬町三丁目の南側、稲荷新道の横丁角にあった化粧品店坂本氏の店で、「美艶仙女香」という白粉を売っていた。名女形瀬川菊之丞（俳名仙女）の名で売弘めたので、この名があり、幕末の草双紙に、盛んに広告を載せている。『買物獨案内』に広告文が載っているから写してみよう。

「此仙女香は常に用ていろを白くし、きめをこまかにす。○はたけそばかんす吉。できものゝ跡を早く治す。其外功能多し。くはしくは包紙に記す。右之薬十包以上御求被成候御方えは、江戸三芝居役者認候自筆之扇一本呈上仕候、趣は、三芝居座頭御弘メ御披露申上候義ニ御座候。」（一包四十八銅）

この店では、横浜開港直後に、さっそく舶来の洋傘販売を始めた。東京の洋傘店の草分のようなお店であった。

（京　橋）

「探幽が筐の雲に残る月　桃青

京橋渡る初雁の声　杉風

伏見駕籠拠其比は秋の風　桃青」

（『花の雪歌仙』延宝三）

狩野派中興の祖、狩野探幽は、元和七年（一六二一年）に鍛冶橋外五郎兵衛町の北隣に邸宅を賜り、代々この地に住居し、世に鍛冶橋狩野と称されていた。邸は京橋にほど近いので、杉風は探幽の名から京橋を連想して脇句をつけたのである。

（朱　座）

露は銀座紅葉は朱座の詠哉　素玄

（『続境海草』）

江戸時代には、朱や朱墨は、貴重品扱いで、「朱座」以外での卸売は禁止されていた。

朱は、室町時代の末に、明国に渡って朱の製法を学んで帰った小田助四郎の専売特許で、京都の朱座は慶長十四年に開設された。

江戸に朱座の移った年代は詳らかでないが、初めは尾張町にあり、正徳元年頃に竹川町に移った。

（木挽町）

やまや月夜はものなき木挽町　其角

（新　場）

「又今宵夜話亭にうかれ鳥

新場の鰹たちまちになし　一十竹」

（『末若葉』）

夜鰹やことに薬師の引合せ　柏莚

思ひかねて鰹さげたり夕薬師　蓼太

新場は、新肴場の意。本材木町二・三丁目に開かれた魚市場で、延宝二年（一六七四年）に、日本橋市場と別箇に設立され、同市場と交替で、幕府への納魚の事を請負い、月の上旬の納魚を分担した。

新場には、「新場の附浦」といって、武川本牧、相州三浦郡八カ村など三十一漁村が附属し、魚荷押はすべて、ここに送ってきた。伊豆沖で捕れる魚は送り舟で力漕してきても、ここに到着する頃には日も隠れて、生きのいい鰹は、勢い夜市で売ることになったのであろう。「新場の夜鰹」といって名高かった。

嘉永四年の『諸問屋再興調』には、新肴場の肴問屋は十三名が載っている。その内、三丁目の和泉屋三郎兵衛は、土地一番の素封家で、中橋通り東半の堀割を、一手請負で埋立てたりした。明治初年から中期にかけて、深川で米穀と干鰯問屋を営み、令名の高かった蘭田、奥三郎兵衛氏は、この和泉屋の後裔である。

（茅場町薬師）

夕薬師すゞしき風の誓かな　其角

（『花摘』元禄三）

茅場町薬師

藤棚も今日に逢けり花御堂　一茶

（『一茶句帖』文化五）

茅場町の日枝神社御旅所境内にあった薬師堂は、本尊薬師瑠璃光如来、慈眼大師の勧請と伝えた。有名な俳人宝井其角は、この薬師堂の南隣に住んでいた。

薬師の縁日は月の八日と十二日で、縁日には、近在の植木屋が多種多様の植木を持ち寄って賑やかな植木市が立った。

薬師如来は、衆生の病患を救い、無明の痼疾（こしつ）を癒すという如来様。堂の周辺には、眼病平癒を祈る「めの字の額」がたくさん掛っていた。

しょぼ〳〵の雨の薬師の縁日も

かゝさず参る目のかすむ人　琴樽

（鎧の渡し）

魁の海や鎧の渡し船　一漁

（『江戸近在所名集』）

日比谷稲荷造営に

鏡屋も氏子に月の光かな　蓼太

八丁堀地区の東南隅にある日比谷町は、もと日比谷（現、日比谷公園の地）にあり、慶長年中、日比谷門造営に際し、代地をここに得て移ってきた町という。日比谷稲荷はその村の鎮守で、昔は社地も広かったらしいが、だんだんに縮少された。祭礼は毎年六月十五日に、日枝神社と同日に執行するのを例とした。当社には、鯖を絶って祈願するとかで、鯖を画いた扁額がたくさん掛けてあると『新撰東京名所図会』に最いてある。

本願寺

時をかへずさくや本願寺の花　（『江戸雀』）

鉄砲洲築地にいたりて

すて石や花のしがらみちり椿　宗伴（『誹諧当世男』）

寒橋

青海や浅黄になりて秋のくれ　其角

（佃島）

明月やこゝ住吉の佃嶋　其角（五元集）

白魚や文にかゝるゝ佃嶋　拙候

佃嶋にて

雲の峯うねり上せぬ土用浪　百里（其袋）

おぼつかな藤に見廻る佃嶋　沾城

干菜にも波の寒さや佃嶋　梅寿

春なれや佃の船に料理人　語長

佃嶋

親持の船の鼠や秋の風　乙二

笹澪の夏越に望め佃嶋　旨原

月登る草のはじめや佃島　逸志（『あやにしき』）

佃嶋

白雲や岸の千船も軒つゞき　完来

裸にてみそぎぞ夏の佃じま　米菴（馭随筆）

漁消（いさり）てしらぬひの佃魚白し　全琴（虚栗）

船かりていざ見に行ん藤の花

佃の嶋の春の夕暮　雁宕（『麥すり古義』）

夕月や佃を越せば寒うなる　山店（『芭蕉庵小文庫』）

佃嶋

風さそふ藤にも浪の姿哉　風舎

佃島

松風遠き江戸の住よし

船からも噺す佃のすゞみ台（右三首『江戸近在所名集』）

汐干狩

住吉や汐干過ても松の月　一茶

心可と佃島住吉の旭おがみに行く

年立や日の出を前の舟の松　一茶

欠鍋も旭さす也是も春（『文化句帖』文化二年）

佃嶋の藤

藤さくや尾も長々し遠めがね　全川（『江戸鹿の子』）

（大尾）

郷土室からのお知らせ

十余年にわたり、京橋図書館郷土室の職員として貢献されてきた安藤菊二氏は、昭和五十一年三月をもって退職され、現在は「京橋図書館調査員」として「中央区年表」の編纂にあたっておられます。

「中央区年表」は、既に「明治文化編」「大正世相編」「震災復興編」の三巻が刊行されており、その続編が今後三カ年計画で刊行されます。

なお、「郷土室だより」への安藤氏の寄稿は、今後も続けていただける予定です。

催し物のお知らせ

◇東京を語る会　第18回

日時　昭和五十一年六月二十六日（土曜日）
午後二時―四時

演題　「江戸・東京の地図」

講師　郷土史家　喜多川周之氏